Gallery 愛海詩 えみし

◎新型コロナウイルス感染予防ガイドラインに沿って対応させていただきます。

木工作家（大阪府）

甲斐 幸太郎 作品展

日本工芸会正会員

9月15日～9月27日

彩遊の号　No.37
愛海詩の会
会　　報
令和２年９月 10 日発行
編集発行人／ギャラリー愛海詩
佐 藤 睦 子
〒064-0821
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
TEL・FAX／(011)613－1112
WEBSITE
http://www.emishi-s.com
E-mail:kougei@emishi-s.com

「愛海詩」二十三周年

ギャラリー愛海詩、愛海詩の会は、二十三周年を迎えました。愛海詩の会の役員、会員そして、お支え頂いております皆さまに深謝申し上げます。二十三年という、ささやかな歴史ではございますが、今、この時を迎え、率直に喜びたく思います。

このコロナ禍を躱(かわ)し、乗り越えて行こうと、二十三年の関に、衒(てら)いのない美しい作品展ができることは、ギャラリーをしている上でまた、皆さまの笑顔、感動をいただく事ができる…と思うと、大きな励みとなります。日本の木工界の若きホープ、甲斐幸太郎氏の作品展です。愛海詩は今年、三分の二に渡りほとんど仕事ができない状態でございましたが、それを乗り越え、素晴らしい作品展ができますことに安堵しております。

この三分の二のある種の静止は、私にいろいろなことを見せ、考えさせてもくれました。今年になり、札幌のギャラリーの灯が一つ、二つと消えて行っております。このような中、私自身、仕事を続ける事への意義を、自分自身に、そして無言で皆さまに問いかけていたように思います。無言の問いかけですから、気付かない人もいれば、気付いて反応して下さる人もおられ、自分と人さまとの人間模様が、その綾が写し出されました。そして私は反応して下さる感性をお持ちの方々の心の灯りをいただき、ギャラリーを続ける事の大切さを改めて確信しております。小さなギャラリーが二十三年続けて来られたのは、お支え下さる人達がいらしてこそです。

北の街に小さくとも文化の灯をともしたく思います。自然の法は美しく、私達も自然の一部であり、一人一人、小さくとも大きくとも灯りを持って生まれて来ました。佳き出会いは人を鍛えその法を伝えて行きます。今、この時を大切に、その時々、少し目線を高くして、ギャラリー愛海詩、愛海詩の会が、皆さまと共にあることを願います。

（佐藤　睦子）

創作中の甲斐幸太郎氏

昨年秋、ＮＨＫの番組、「日曜美術館」で甲斐幸太郎氏を知り、感動し、大阪へ会いに参りました。甲斐氏は申します。「日々、日夜の木との対峙、構想は楽しく、苦にはならない。素直に自然体でまだ見ぬ自分の仕事を気を衒うことなく、新しい感動を生み出して行きたい」…と。創作作品、言葉、人柄からも日本の木工界の宝であることは間違いありません。北海道札幌で初めての作品展です。盛器、銘々皿、花入、額、盆など、約35点を展示します。比較的大きな作品は木の迫力、どこまで美しく彫ることができるか、木目を読む作業も含め、芸術性を求めて、小品には鑿(のみ)のタッチの工夫があり、木のぬくもりが伝われば…という思いがあります。どのような作品でも、１つとして手を抜くということがありません。北の街の人達に一流の仕事と出合ってほしく思います。この良い機会、是非時間をつくってゆったり拝見下さい。

「ご挨拶～作品展によせて～」

木工作家・甲斐幸太郎

木工の世界に飛び込んでもうすぐ20年になります。これまでたくさんの方々に支えていただき、拙いながら仕事を続けることができました。そして、この度はギャラリー愛海詩で個展を開催させていただく事を大変嬉しく思います。

日本は世界で有数の森林国で、欅、栃、桜、桑、楓、楢、栗、楠、などなど…、百を超える有用樹が自生しています。長い年月を経て四季に育まれた木々の年輪は、時に人智を超えた複雑な文様を見せ、深く畏敬の念を抱かせます。木は生き物で、一つとして同じ物はなく、若い木があれば、老いた木もあり、素直な木もあれば、暴れる木もあります。樹種によっても個性があり、欅は力強く、栃は優しく、栗は素朴な中に雅趣があり、桧は清らかな印象を受けます。それぞれの個性を見極めながら作品を制作するところに木工の醍醐味があり、難しいところでもあります。日々、一期一会の思いで木に感謝して制作しています。

木工は様々な伝統技法がありますが、私は主に「刳(く)り物」という技法で物造りをしています。「刳り物」は、一枚の板あるいは一個の木塊からノミ、鉋、小刀などを用いて作品を削りだす技法で、作り手の思いを自由に表現できるところが魅力です。刃物を研ぎ、コツコツ削る。素朴でプリミティブな仕事ですが、だからこそ工業化が進んだ現代社会で、心の温もりを伝えられる貴重な仕事ではないかと自負しています。

私は京都の専門学校で木工の初歩を学んだ後、幸運なことに大阪府無形文化財保持者、藤嵜一正先生の工房で木工と漆を学ぶ機会を得ました。６年程で指導いただき、木工の技術はもちろん感性を磨く大切さを教わりました。

我以外皆師也、皆様の御意見賜りたく、どうぞご高覧下さいますようお願い申し上げます。

略　歴

1976年	愛知県名古屋市に生まれる
2003年	京都伝統工芸専門学校 木工芸専攻　卒業
2004年	日本伝統工芸展近畿展初入選 木漆工芸作家藤嵜一正氏に師事
2007年	大阪工芸展大阪府知事賞受賞
2010年	日本伝統工芸展初入選 （以降入選８回）
2012年	大阪市内にて独立　制作を始める
2014年	ＭＯＡ岡田茂吉賞新人賞受賞
2015年	伝統工芸木竹展東京都教育委員会賞受賞
2016年	伝統工芸近畿展近畿賞受賞
2019年	日本伝統工芸展文部科学大臣賞受賞 「栓拭漆三足器」文化庁買い上げ ＮＨＫ番組「日曜美術館」で仕事振りを紹介される
2020年	伝統工芸近畿展大阪府教育委員会賞受賞
現在	日本工芸会正会員

欅(けやき) 拭漆(ふきうるし) 手刳(てぐ)り合鹿椀(ごうろくわん)
（直径133mm×高82mm）
感動の合鹿椀です。手刳りをあえて作っていただきました。素朴な力強さが手から伝わり、時を経るほどに趣が深まります。

楠(くす)拭漆(ふきうるし)三足器(さんそくき)
（奥210mm×幅496mm×高106mm）
卓の上に大きなイチョウの葉がふわりと置かれている風情を想像します。手前の一足は軸に見立てため息が出るほど美しいフォルムです。自然な素直な線が際立ちます。

欅(けやき) 拭漆(ふきうるし)波文(なみもん)ノ器(のうつわ)
（奥208mm×幅512mm×高145mm）
波にたゆたう小舟をイメージした作品です。流麗な木目を形の中に生かし、波を受け進む流れるような線に作品の持つ優美さを感じます。

アルダー拭漆(ふきうるし)輪花皿(りんかざら)
（直径210mm×高25mm）
ノミのタッチの違いが魅力的な作品です。彫りの動きが躍動感と優しさとさっくりした素朴さを感じさせてくれます。ノミが作る線は木の息使いのようです。

桧(ひのき) 拭漆(ふきうるし)マグ
（奥88mm×幅140mm×高70mm）
とても持ち安く、軽いカップ。側において愛しみたい作品です。一木削りが優しい個性を出します。鳥が木の実を咥えているようにも見え愛らしいフォルムです。

黄檗(きはだ)拭漆(ふきうるし) 稜線皿(りょうせんさら)
（奥232mm×幅558mm×高30mm）
一枚の木の葉の葉脈まで写し出し、光や見る角度により、その葉脈が木目の流れに呼応して静かに語りかけてくれるようです。稜線の美しさは見事です。

桧(ひのき) 堆漆朱盃(ついしつしゅはい)
（奥55mm×幅80mm×高60mm）
朱の色調は10回ほど塗り重ね、研ぎ出して美しいグラデーションを見せています。花びらの蕾が開いた時のような色や線の美しさに魅せられます。

楠(くす)拭漆(ふきうるし)大片口(おおかたくち)
（奥138mm×幅247mm×高95mm）
たっぷりとした片口、何かユーモラスな形です。用途もアイディア次第で楽しめます。刳りぬきの技が冴え優しい丸味が豊かな時を刻みます。

愛海詩の会　会員の皆様へ

愛海詩の会は健やかな文化的働きを促進している会でもありますが、「愛海詩の会企画」で、こんな事をやってみたい、やってほしい…等、ご要望、ご意見をお聞かせ下さい。ご自身、あるいはお知り合いの方の才能を皆さんと共有させていただきたく思います。お問い合わせ等は、愛海詩の会事務局があるギャラリー愛海詩までご一報下さい。

木工作家・甲斐幸太郎氏を囲む会

右記の通り、ギャラリー愛海詩２Ｆで開催致します。各日、席数が少なくなっております。先着順でございますので、早目にギャラリー愛海詩までご予約下さいませ。楽しく豊かな時を共有したく思います。

自然の美、木肌の温もり、木の声に心を寄せる作家の息遣い…
刳り物に命を吹き込む様を伺います。

日時：令和２年９月18日（金）
９月19日（土）
９月20日（日）

いずれの日も　13:30～15:00（先着５名）

チケット代金：各日 1,000円
（お茶・レクチャー付）